遞信省認可

いらつめ第六十六號目次（明治廿三年八月二十日）

●文藝美術……花兄弟二枝梅香…………立花家　薫
○盆燈籠（俳句、和歌、唱歌、文章、淨瑠璃）
松の舍＝磯の家鳴子＝仁科壽子＝柳巷
＝南山女史＝山本鷲醒＝後樂散士＝紅
山＝奥野保橘＝流嬌＝中山花子＝櫻陰
子＝竹下山人＝馬場松三郎＝うめ子＝
水野秀＝狂太郎＝藤元なさ＝松乃＝三
抜きぬ
○高尾山紀行（二）…………佐々木信綱
○聞水鷄（和歌）…………太田みつ子
○幼時の寫眞（韻文）…………弄月子
○吾こゝろ（韻文）…………弄月子
○俳諧論のごたく
○戸隱山紀行（二）…………美妙齋主人

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第五十八號至第六十七號十部版權所有
明治廿三年八月十九日印刷　一　明治廿三年八月二十日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町拾番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本号には
立花家氏の脚本懸賞文藝盆燈籠
高尾山紀行戸隱山紀行●俳諧論ごたく其他聞水鷄といふ和歌
吾心及ひ幼時の寫眞といふ韻文

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

花兄弟二枝梅香三幕目　立花屋かをる

場割　手塚屋奥座敷の場　敷島妾宅の場　同梅林の場
役割　浪花梅吉○花房香太○敷島妾阿梅實ハ梅子○手塚屋女
御春同御夏敷島八重造○子分大勢竹本連中

本舞臺一面の平舞臺上手床間好みの軸花瓶に梅花を活け續いて違棚茶璧上下折廻し襖の出這入り舞臺に火鉢道具など宜しく都て手塚屋奥座敷の体茲に御春御夏島田かつらやつし前垂れ掛け下女にてそこらと方附て居る此摸様藝古唄にて幕開く

（春）サア〱此樣に御座敷も美麗に掃除が出來たれバ早く御歸りなされバよいな（夏）ほんにさうでムんす。私も早く御顏が見たい（春）親分樣が美男の所へ彼の小分の香太さんいつぞや江戸の御客から土產にもらつた錦繪の菊五郎と云ふ役者にそツくり（夏）夫故御二人が御通りの時ハ往來も留る女の見物（春）夫れで御二人とも大のかた物いくら此方で思つても（夏）磯の鮑の何とやら、夫ハさうともう御歸りに（両人）なりさうなものぢやなアと敷物など敷いて居る合方キツパリとなり直に床の淨瑠璃になる「程なく歸る梅吉が内の思の結ぼれていつもより外に顏の色夫れと見るより口々にと此文句にて奥より梅吉思案の体にて出で來る二人ハうれしき仕打にて（春）これハ〱御早い御歸り（夏）先ツきから御待ち申しました（梅）外に出ると用事も多くつい〱晩くなりましたと敷物の上に坐る（夏）いつもと違ひ御顏の色のたゞならぬハ（春）もしや御氣分でも惡うハムりませぬか「問れてハツとそしらぬ体（梅）いや少し胸が痛む故それで顏色も惡いかも知れぬが案じるとハムりませぬと宜敷こなし（夏）左樣でムりますか（春）大事の旦那樣私しや是から明神樣に（夏）私も一所に願掛けて少しも早く直るやう（両人）御願ひ申すでムりまする（梅）ハ、ゝ、いつに替らぬ御親切こりや直になほらねバなりませぬ然し御前方も用多なれバこゝに構ず御出なされ今に香太が歸るでせう（春）でも意地の惡い少し位ゐ御側に居ても御迷惑ではムんすまい（夏）餘りつれない旦那樣　上「聽こえぬはいなと右左離れ兼たる蔦のつら此方ハいとゞ迷惑顏と二人ハ梅吉にすがる梅吉ハ迷惑の仕打（梅）でも情ない、いやさ餘り御親切がすぎまするどうぞ免して奥へ行つて下されと云へと二人ハうるさく取りすがる梅吉ハ少し腹の立つ仕打にて（梅）えヱ聽き譯のない、私や女ハ大嫌だときツと云ふ「きつぱり言れてほろ〱聲（春）玉の盃底なし男二の膳付の据膳に箸も取らない戀知らぬ（夏）えヱ男冥利が盡きるぞへ「仇口まぢり両人ハとつかは奥に入る跡に腕こまねきて梅吉が胸の有や無やつき立つ思ひ暫し思案に暮れたりしがやゝ有つてと息つき。二人ハ一寸可笑味あつて奥へ這入る跡梅吉ハ。思案の仕打合方になり（梅）今更悔るも及ばねながら性根の腐つた女と知らず思ひを焦れた我愚さ戀なればこそ逐一に切なき胸を打ち明けて話した時には涙を浮べ深き仔細の有る故と斷り言ふも信實の面に現れ其時ハ共に憐を催したが矢張り茲らが誑されて人も有うに八重造の妾となつて飽くまでも我とはなぶる惡くき女

上「こぶしを握り口惜泣き鬼をあざむく壯男の涙の露ぞ是非もあきと梅吉ハ口惜き仕打　上「幾百人の小分の前あに面目にすごくと此儘江戸へ歸られやう(梅)是非に及ず此上ハ梅子を殺して八重造と勝負と爲るの男の意地然し知らぬ世間でハあれ見よ浪花の梅吉ハ藝者に迷ひ其果て命を捨てた阿房漢痴情の爲めに身を失ふたはけ者との人のそしり　上「汚名と殘す笑艸夫れ知らぬにハならねども男を磨く身に取つてハ侍の言ふ武士道同然(梅)是の只のものなればそんな腐つた女ならふつり思ひ切るなれど生中浪花の梅吉とか人に立られ敬まはれ男を磨く我身にハどうも女ハ兎も角も多くの小分や世間に對し田舍へ行つて梅吉の藝者を土地の達衆と爭ひ不覺を取つて引込んだと言はれる時ハ恥の恥余義なく女と手に掛けて切り死するも前世の因緣今宵ハ密かに忍び入り只一刀に刺し殺さんと宜しく思入れ　上「問れず語りを襖ごし聽くやきかずやほろ醉の德利片手によひよろ／＼と足もしどろに花房がと奧ゟ花房香太誂の德利を持ち大部酒に醉ひたる仕打にて出來り(香)え〻兄貴何と考へてゐなさる(梅)おう又大部機嫌だな　上「熱柿の香ぷん／＼と香太ハ膝をすりよせて香太ハ思入有つて梅吉れ側によりよ(香)おい兄貴巳や御前に願のあるせ(梅)あんだ唐突願とハ(香)外でも無いの親分小分の緣を切つて呉ねェ(梅)ハ、、又始つた酒の機嫌大概にしろ手前ハ酒を飲むと平生と丸で人の違ふ醉の醒める間奧へ行つて寐て居ろ急の願いに女中を頼むも氣の毒だどれ己が蒲團を敷いてやらう、　上「小分思ひの一筋に立たんとするを押しとゞめと梅吉の立うとするを香太ハ止め(香)兄貴よして呉んねェ醉つてこんなことの言はれるものか(梅)そりや本性で言ふのか(香)當り前よ言ハゞばこれの一世の別れ(梅)や(香)あァに別れて江戸へ歸つた上勝手なことと爲るのだからどうか緣を切つて下せい(梅)己れも男だ切つてやらねェ物でもねェの一体どう云ふ譯なのだ(香)譯もへちまも何んにも無いの平ッたく言へば御前に愛想の盡きたからさ(梅)むゝ(香)る今業平とか八代目とか人に言ハるゝ兄貴でも意氣地の無いに巳ャふつ／＼愛想が盡きたとわざと言ふ　上「酒の言ハする傍若無人恐くしと思へど我と又今宵限りの命の瀨戸これ幸ひと心にうなづき(梅)成程手前の己に愛想の盡きたら巳も手前に愛想の盡きた。今のらすつり緣を切つたと思入れにて云ふ(香)なにそりや緣を切つて下さいましたの(梅)おう緣と切れば赤の他人何處へなりと勝手に行け(香)それの拉ちの(梅)や(香)いやせい〳〵しました　上「氣強く言へど双方の互に包む心の底香太ハ德利を取り出しと香太ハ德利を梅吉の前に置き思入有つて(香)斯う別れて仕舞つてハ是からどこへ行くかも知れず幸ひもらつた此銘酒これで別れの盃となんと爲ちやア下さるめいか(梅)盃をしてやり度いが知つての通り願酒の身。だの長年一所に居たよしみ願酒を破つて盃爲しやう(香)なにそりや願酒を破つても香

太ハ嬉しき仕打よてぱろりとする(香)え〻難有うムります　上
「かたじけなさも口の中涙のゝ込ゞ目に泣かぬ片氣ぞ江戸の
はまれあると二人ハ涙を匿してれが別れと云ふ思入にて互よ
盃をする(香)斯う盃とまた上は何にも言ふにハ及ぞねヱが兄
貴ハ一体正直で毛筋程も曲つたことが嫌ひの代り他の者のら
少しでもろでねヱことをされた時自分の心に引きくらべ其の
腹立も亦格別随分命も捨て兼る汐前の氣性ハ知つて居ります
あゝ女嫌ひの評番で柳橋へも芳原へも足も向けねヱ兄貴で有つ
たが飛んだ魔物の梅吉に(梅)や(香)いや梅吉兄いと誰知らぬ
身分とあつたも心立てどうぞ短氣を慎んで達者で居て下さい
ましと是迄真面目で言ひと言ふもの〻赤の他人に入らぬ汐世
辞もうそろ〳〵汐暇と致しましやうとたわいなき仕打　上「辞
にまぎらし夫となく氣遣ふ意見のふま〳〵も胸にひつしと梅
吉が香太の顔を打ちあがめ(梅)それぢやアもう行くか手前も
随分丈夫で居ろ(香)兄貴汐前もとぱろりと仕打とゞ氣を替へ
他人の所へ長居ハ無用どりや出掛けやしやう　上「立上れども
此年月大恩受けた親分にこれ今生の別れかとつらさ悲しさ押
しかくす胸を張り烈くうき思ひ此方も同じ現身の命と今宵一
夜ぎり明日とも待たで散りてゆく春よさきたつ梅吉が五臟を
絞る哀別離苦と二人ハ宜しく愁の仕打とゞ梅吉ハ堪へ兼て
(梅)香太まて(香)へいと二人ハぢつと顔見合し　上「これが此
世の見做めと同じ覺悟の兩人が互に心の暇乞と二人が始終愁

を匿し心を包むこと宜しくわる(梅)未練らしい早く行け(香)
おう行のあくつてどうするものかと立ち上り長年受けた大恩
ハ決まて忘れハ致しませぬきつと御禮ハ(梅)え〻禮も何も入
るものか(香)兄貴さらぞ(梅)ふう　上「盡きぬ名殘を内と外襖
ひつしやり花房が思ひ切つてぞ出て行くと香太ハ思ひ切つて
奥に這入る跡梅吉ハはッと思入れ本釣鐘を打ち込ゞ愁の仕打
上「早慈光寺に鳴る鐘も戀と無情を撞き分けて夕暮告る會者
常離定めなき世の有様ト始て落す一雫も梅吉ハ涙を流し(梅)
こりや香太手前の無法の言艸を聞きまよまて縁切つたも己
も今夜死ぬ覺悟氣強く言つたハ免るまて呉れ　上「獨り涙にく
れかゝるたそがれ時のいそがのしさ下女ハ行燈携へでと奥より
以前のお春出で來り(春)御風呂に汐召ま被成まし(梅)今夜ハ
湯にハ這入るまい(春)左様でムりますか(梅)香太ハもう出て
行つたの(春)はいあんだか香太様ハいつもになくまは〳〵と
此の御坐敷の方よ手と合せ涙ぐんで外よ御出になりました
(梅)どうやら仔細の(春)え(梅)いや又飲ゞよ行つたのであら
う(春)どりや汐膳の仕度を致しましやう　上「言ひつゝ立つて
入りにけると汐春ハ行燈を置いて奥に這入る跡梅吉ハ脇差を
拔き白刃を見ることと宜しく有つて(梅)流石ハ名よ負ふ五郎正
宗其の切れ味をとぢつと仕打　上「床にいけたる紅梅にこあた
ハふいと目をとゞめ梅吉ハ思入有つて(梅)手活の花の紅梅も
やがて散り行くト生け花の紅梅をぽんと切り夜嵐ぢやあアと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にッこり思入れ　上「そるとき大刀風飛ふ落花春を散してと床の送り時の鐘の道具廻る

作者一寸御愛讀れいらつめ方ょ申表上けます當脚本も二幕目迄ハ丸で正本の通り「と書」「鳴物」あど一々記載方も正式でしさが彼れでハ紙面を埋めますから三幕目より改めて筋書体ょ直しました

拙作狂言も四幕にて結局と致し逐々(佳境自分バかり)に入り升すから御贔屓甲斐に大詰め月夜の仇華まで御覧の程を願ます　　　　　かとる記

第二十五回懸賞文藝應募得點

題　盆燈籠

○俳句

そよとくる風にきえたり盆燈籠……松の舎(ツルガ)

つるしさる燈火ゆりし盆ハ月……磯の家島子(オホサカ)

灯ともしてうてちぬ亡君に一とあかり……同　上

訪いこぬ客もてあしや盆どうろ……仁科春子(トウケイ)

哀れさも深うき折懸どうろかな……同　上

ゑがゝれし艸やうるほふ盆どうろ……柳　巷(トウケイ)

ふけぬれバほかげもしめる盆燈籠……南山女史(—)

亡き人の俤もがあほんとうろ……山本蘆園(オホサカ)

燈火のどこやらくらし盆どうろ……後樂散士(ナカノ)

いょし人思ひて悲しほんどうろ……紅　山(イセ)

吹くたびに又消えるかと立ちかゝり……奥野保橘(オホサカ)

以上十一句無賞

生盆の辞儀やふと見るほんどうろ……松の舎(ツルガ)

數多くしても淋しゝぼんとうろ……磯の家島子(オホサカ)

おもかげをうつして床し盆燈籠……同　上

彌ましていちらし赤きほんどうろ……仁科春子(トウケイ)

人さまゞ浮世ハまてり燈籠かあ……同　上

賑しくつけてさびしきとうろうな……同　上

年よれハ寄るやかあしほんどうろ……柳　巷(トウケイ)

おぼろげょ光りしめるやほんどうろ……南山女史(—)

持ちたがる兒心やさしほんどうろ……山本蘆園(ナゴヤ)

思ひ出す紀念のかげやほんどうろ……流　嬌(オホサカ)

燈籠に見えすく海のひかりかあ……中山花子(タジマ)

燈籠や手向の花も露のまゝ……同　上

消えるりと見るまょともるきりて哉……奥野保橘(オホサカ)

以上十三句第四等賞

片田舎町とありけりほんどうろ……松の舎(ツルガ)

ほめられた主が見あはす盆どうろ……同　上

軒はなれせぬ海士の火でなく千鳥……磯の家島子(オホサカ)

晝見ればさびしみ深しほんどうろ……仁科春子(トウケイ)

燈籠やまつはる蝶ょ置こゝろ……同　上

せめてもの影ともうつれ盆燈籠……同　上

來る魂のあないや軒のぼんぢうろ……柳　蕙（トウケイ）

我袖に露をこぼすやぼんどうろ……南山女史（一）

多きはぞるは哀れありぼんぢうろ……山本蕉醒（チンゴ）

其人とおもへばくらし盆ぢうろ……流　嬌（オホサカ）

なつかしやおもかげ見えし盆燈籠……同　上

おもかげや魂棚てらすぼんどうろ……同　上

不孝子もおもひだすなり盆ぢうろ……後樂散士（ノトカ）

おこたりし涙もでるかぼんぢうろ……中山花子（マツン）

明うてもどこやら暗きぼんぢうろ……奥野保嬌（オホサカ）

以上十五句第三等賞

思ひ出で弟の旅路おもはるゝ……紅　山（イセ）

右審査以外

○和歌

たま棚と照らす燈籠の小夜ふけて
火影さびしく昔をぞおもふ……中山花子（マツン）

魂まつる心にめぐる燈火の
そらもさやかにうつる夜半かな……同　上

おあしとき同じ燈になりぬれど
おきるかあしえまちらべよろこぶ……柳　蕙（トウケイ）

夕風の肌へをふかし吹くごとに
ともしとふもに消えんとぞする……同　上

小夜ふけて光かそかに成りにけり
みたまゝつりのまどのともし火……櫻陰子（ヘミカ）

秋草のきりての色こさながらに
ももれぞ消えし君いづくに……奥野保嬌（オホサカ）

以上六首無賞

軒端なるともしの風におで光くば
みたまの途にわへぐあるらん……柳　蕙（トウケイ）

かゝげてもりひなき燈かげ消えて
月のみ高くそらにすみけり……櫻陰子（ヘミカ）

白露と消えにし人の俤と
おもひうかぶるともし火のもと……同　上

亡き母の墓み手向る盆燈籠
西へ行路れ乘とものかな……山本蕉醒（チンゴ）

以上四首第四等賞

魂まつるそのま心の一すぢを
千すぢまてらせ法れともし火……中山花子（マツン）

燈籠をとる手におつるもろ涙
あつきこゝろをみたましりなん……柳　蕙（トウケイ）

秋くさと描くともしれ影みれば
ふたゝび袖に露ぞこぼるゝ……櫻陰子（ヘミカ）

いとゞ又ありし昔ぞしのばるゝ
のきれともしを見るにつけても……同　上

心さへ影さへ細そくなりにけり

みたまゝつりの夜半のともしび…………同　上

魂まつる燈の影もうすれ行き
消ゆるひかりのおもひなりけり…………同　上

さらぬだに露けきものを魂まつる
燈火を見ればおきまさりけり…………同　上

以上七首第三等賞

審査以外の分（各々次に掲げて試に其價格を附けました）

古しへの飛鳥の寺の燈火と
世々の御法のためしあらまし…………中山椎子（マツン）

たふとくも猶なつかしう見ゆるかな
露おく山のまつりのともし火…………同　上

さびしさのかぎりありけり秋の夜の
みてらにはそく見ゆるともし火…………同　上

彌陀もまた年に一度の今宵には
賑やかな娑婆こひしかるらん…………松の舍（ルシクケ）

評　狂歌です。

蔦かつらまとへる寺も秋來れば
不夜の城なす盆どうろかな…………山本蕭醒（コナノ）

評　趣向は奇でそこの調べの足らいです。

盆燈籠見るもうれひの種なれや
亡きはらからの思ひやられて…………同　上

手向け火は迷ひそらすと人いへど
佛土の底にひかりもくらん…………竹下山人（フシマク）

以上三首無賞

盆燈籠今年は燈す吾身さへ
又來る年はともさるゝかも…………山本蕭醒（ゴナク）

なき魂の道のしるべと燈す火の
あつきこゝろを神やうくらむ…………馬場松三郎（フレマク）

折る指の數重なれば燈籠の
ひかりはてくも心消ゆらん…………同　上

評　以上三首調べの拙です。

以上三首第三等賞

盆燈籠ともさるゝ身は兎に角に
ともすわれこそ悲しかりけり…………山本蕭醒（ゴナク）

評　同上

右第二等賞

○唱歌

（イ）　うめ子（オホサカ）

なき魂の集ひくて草の露　たまなそ光うつくしや。
影さゝず光もかさず行く月の　雲にかくれてやみ高し。
魂棚のまへに小ぐらき盆燈籠　紀念のと思へば寒し秋の風。

（ロ）　櫻陰子（ミヘ）

あつりしや山の奥にも魂祭り。　送火や送りきりある鐘の聲。
白さぎと燈籠の上を飛てゆく。

なき人の魂も若やと顧よて、軒端にともす盆燈籠
床にくもらす反魂香　香の烟りも風よちり、
うする〻光りいとさびし。　さびしさまさる夜半のころ
遠山寺の鐘のおと　むみやうのねむりさまさせとや
いともさやけくひゞくあり。　見れバ火影も消えうせて、
香の灰さへさめててぬ。　残るて廣き大ぞらに
眞如の月のてらすのみ。

以上二曲第三等賞

○文章

(イ)　うめ子(オホサカ)

「五郎兵衛さん。　まアきたない古い燈籠を持て何處へゆいでおさる」

「おゝ太兵衛どんか。　されバいのう、この燈籠はそれ去年死んだ巳れが隣りの次郎吉の拵らへてくれたんぢや。丁度出來あがつて軒よともした其翌の日急病で死んだがのう」

「おゝやんにさうであつる。　假令己らが村ひでりであらうとあの人ハ助けたかつた」。

「小器用に獪もあれが書てくれた。　何んと書入れが味ハひちやないう。

來て見れバ山より低し高どうろ。

茶と一つ汲む間に棚經終りけり。

魂祭りにハせめて茶おど振舞てふとおもふに飲ともせぬ間に死によつた」。

「あゝさうりのう。　それで今年ハその燈籠と祭つてやらつしやるのか」。

「おいのう……あゝ草葉の影で喜んでくれゝバいゝが」。

(ロ)　水野秀(オホサカ)

はつ秋の夕暮にそよふく風よ靡る盆燈籠軒端の闇とてらすともおどてあの世を照らすべき。　都も遠き山里の賤が伏せ家の燈も過ぎにし人を慕ふ同じ心の盂蘭盆會――残る暑さと一浴よ洗ひ流して佛間の勤行も終へ、團扇片手に椽端に出で、恐めしさうに燈籠よ向ひ、口の内にて…………母ハやうやく坐りしが只團扇と動かすのみ――思ひに沈みし模樣――

少時して、

「この燈籠を拵らへてもう何年になるか知らん」

「あの母上さん三年ですが……」

「れ慈父さまの亡くなられました翌年でしたから……さうですねエ……」

「あゝさうでしたのね。　忘れて居りましたよ」。

云ひ合ハさねど無常と嘆つ一團居――睫の露をかくす妹――宥ける母――如何慰めてよからんと、

「お秀さん今日到着いたいらつめを取ておいで」

「浄姉さん何處に……」

「中の間の机の上に置きましたよ」。
「そい取りて來ましやう」。
立ちあがる妹、向きなやる母。
「あゝ今日は暑さ三伏より暑くあつたよ」。
「歡枯らしとハ今日はことでしやう。 妾等とハ違ひさぞ老母上にハ御苦しうムりましたでしやう」。
「いえどうしてかはる〴〵あふいでくれるから苦しいとも思ずに暮しました……火の中ょ氷を得るとハお御方を持つ私の事ですよ」。
「あゝ勿体ない。 妹が聞いたらば喜びましやう」。
といふうち妹ハ靜かに坐りて讀みつけました。 聞く母は滿足頭、
「面白い小說ね。 何方はお作かね？」
「これハ美妙齋先生はです」。
「あゝさうですか。 結構に出來たことねエ」
讀みつ歎しつ笑ひ聲は外に漏るゝも知らず興ょ乘じて夜ハ更けぬ。 母ハ喜びながら妹ょ伴れて床に入れり。
いらつえこそ母と妹を慰えしもは。 拙き文と寄せて感謝せねバならぬと見上ぐれバ—將に消えなんとする燈籠ハ—未期は如く恰も四年前は……更け行く空は白露ょ思はず袖ハうるはいにけり。
評 意匠ハ可愛らしいですが句が練れません。

以上二首無賞

（八）

狂 犬 郎（イセ）

おやあなたハお母さん。 いつお歸りなすつたの？ お父さんも妹も私もゝうもッ待ちましたは何れッてッはんとに言ハれたこッちやありませんよ。 お母さんあなた今まで何處にいらしッたれ？ 去年は春どこやら遠方へ往くと仰者つたまゝで、もぅや一年は餘にもなりましたよ。 しかしまア御歸りで私も安心しましたわ。 おは、、、お母さんあなた餘所は宅ぢやあるまいし、そんな御遠慮がいりましやうか。 まア奥へさアー あらお母さんそんな佛壇は側ぢや緣喜がわるいぢやありませんか。 まアお母さんとーしたことがあうなすつたんだらう。 はやうお父さんがお歸りなされバいゝが。 それにしても妹ハ何處へ遊びにいつたんだらう。 あゝお母さんがお歸りなすつたらにとかに氣がのせゝくしや〳〵して、何ぶか忙がしいやうになつてきたわ。 これがらひとはしりいつてお父さんを見てきましやう。 あれッお母さんまる何處かへお出でなさるは？ 叔母さんとこへハ私がしらせに往きますよ。 まアゆッくりおやすみなすつたらどうでそ。 いえ違ひますそ？ 何處へお出でなさるは？ お母さん！ あれッ氣のせはしたないは。 お母さんぢやねエ。 お母さん！ お母さアん！ お母さアん！」

「おみさ！　おみさ！　魔されてゐるぢやないか。　おそさよ」。

これ聲に私はびツくりして目を瞬きますと枕元には父上が私を揺りおこしてゐられました。　私は胸をさすりながら、私は前には佛壇の側に吊した一そうの盆燈籠――母上の初盆とて捧げた盆燈籠のあかり。　今は明又滅！　消えんとしてまた明けき無常の觀を見ました。

右第四等賞

千（二）　　藤元あさ（サカヒ）

千松や千松やそなたは百年待たとてコレワイノサー／＼千年万年待つたとて何の便りの有るぞいのヤツトコセイノコレワイセー

盂蘭盆の夕手拭ま深かに装りたる若い男女の幾團隊の塵を蹴たてゝめい／＼狂ひ歌ふ音頭の噪しさ。　その、其の噪がしい音頭も余所に聞いて、只獨り涼しい風吹く椽端に朧ろに照らす盆燈籠を見ながらたゝずむ一個の處女。　見れば何處一点の瑕もない美しい顔貌。　何故？　雙の目には玉の露溢れる斗り「生者必滅會者定離……」とは言ひながらあの涙男樣、大なる志を齋しながら………あゝ今時分は何處に？　恰度去年の今夜、涙男樣と只二人れゝさう／＼樂器のしらべ『戀しき吾君』、涙男樣は鳳琴、妾は須磨琴。　つひ夜の深けるのも知らずに……あゝはんの一場の夢となつた？」

懐より取り出せ一片の寫眞、盆燈籠の光にすかして、

「れゝ、此愛らしひ御顔、お笑ひなすつてからに……何故まアれ死になすつた。　此寫眞を貰つた時、まさか今夜の悲しさあるとは。　あゝ今頃涙男樣は如何に……」

千々に砕くる心、寸々に裂ける腸、今は乙女も其處に座つた。

同時に聞ゆる音頭のはやし。

親と親とのいひなづけ、有し樣子を聞くよりもヤーレ／＼嫁入する日を待ちかねて、お前の姿を繪に書かしヨーイ／＼見れば見るほど美しい。　こんな殿御と………回向せうとてお姿を繪に書かしはせぬものぞコレワイノサー／＼魂しへかへす反魂香。　名畫の力も有るならぞヤツトコセーノコレワイセー

「れや今の音頭あれは廿四孝の十種香。八重垣姫の………あゝ昔も今もおなじ事……」

夜は十二時、月の影は早や中空にあり。　それに乙女は俯は頭を垂れたまゝ－消えかゝる盆燈籠の下で……

評　盆踊りを用ゐた處は手際です。

右第三等賞

死（＊）　　松乃（イヘシロ）

死ようせし人の靈の來るといふ盆。諸方より供へてくれろとてこせし燈籠、走馬燈籠を好きであつるからと特に造つてくれた出入の某。　あゝ坊の靈はこれを見てくれるぢらう

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

か。　これを坊ちやんよ上げて下さい、と來たる坊の生前の友達、歸らうともせず、つれ〻子供と大きいの、美しいの、面白いの、その品定め。　あゝ坊の靈も遠い所から來てあのやうによろこんでくれるぶらうか。　眞に來るものゝ、來ざるも〻か、影も見えず、聲も聞えない。　子のために愚痴にあるはゝのあさと思ふても尙………去年まで疑ふた極樂とやらも眞にあるのか………と先年子とあくした人の話し其のまゝを書いたのです。

母（一）

後樂散士（ナガ）

母ちやん今夜はお祭禮？　エ？　大層燈籠があること、何のお祭禮だらうねエ母ちやん」。

ぐじんせなく尋ねる無心は小兒をぢつとあおめ、早や目にもつ涙！

「まア此子は………今夜は盆だから皆さんのお家で燈籠をあげたのです」。

云へど解らぬ小兒は意地ばるくも………

「母ちやん盆とは何？　えエ？」

尋ねられる其苦しさ！

「盆とはね―祖父さんや祖母さんや、それに去年死………死なれた父さんおせをまつることをいふれです。　とれ坊はいゝ子だから其處にあるマッチを取つてれくれ。　父さんにお燈明をあげるのら」

取り出せし燈籠に火を點し軒下にさげるを見て小兒はさも嬉しさうに、よこ〳〵しながら……

「れや明るくなつたねエ。　坊の家のが一番きれいだ母ちやんあの燈籠は父さんか？　えエ？」

問はれたときの母の心は如何でしやう？………………

評　結句が無かつたら猶絕佳でした。

以上二章第二等賞

淨瑠璃（イ）

三阪絹（ナカ）

うき宿世の椽端に娘は一人憂思ひ。　それも高くは得も岩代の結び松、まつ人絶えし果敢なさや。　檐よりけてし燈籠の火も瞬きて涙に咽ぶが如くあり「としのふすまの新枕まだかはしてそせね、親々の許しをうけたこひ同志、世の中晴れて我夫よ我女房よと呼ばれつ呼びつせうるゝも今一年の曉と頼み居し其甲斐更にあく涙雨とふらあんわたり川水まさりなむかへりこん。　殊に此盂蘭盆の夜は先祖代々の亡魂悉く娑婆に歸りて來ますと聞く。　なれ夫婦は二世れもの、昔し誓ひし言の葉を今尙忘れ玉はずば一目なり共のう我君、戀しき姿をみせてたべ」と人なる如くかき口說く少女心ぞいぢらしき。　折りしも彼方の佛間より片手に撞木、片手にはかねて娘の祝言を心違へと氣は一つ共に待つてゐた父親側に立ちより「おゝ娘や。　泣き顔は親子の間ぢや隠すに及ばぬ。

おれも目出たい盃の其夜よりまだ忘れ居らぬ高砂を謡ふて、初孫の顔見る迄は定命を無理よでも引延して生てゐたいものと思ふて居つゝ位ぢやもの。 まして思ひ思ふた、いやあの此おれが思ふて居たのぢやが其菜つみ、水汲み、苦楽を分けてつれ添ふといふ人に離れたお前、無慙しかろ／＼と親は子を子は又夫を思ふある涙は袖よミついつゝ、いつの程にか燈籠の淋しき光も消え果てゝ、露のねぐらよなく虫の秋は夕べの一入に物の憐れを添へよける

評　薄き宿世といふ題が面白く有りません。　但し全体で等級と第三等賞です。

高尾山紀行　(二)

佐々木信綱　原
やまだ美妙　添

此あたりより、杉苗百本はたれ、五百本千本はたれと記せる木の杭立つゞきたり、こはこゝの不動に願ふ事のあるよ、其願の叶へる折かく奉るとぞ、高尾山はかねてより紅葉よろしと聞ゐたれと、今は若葉にて何れ木とも見かず、ゆくての杉はいと大きなるが多し、登りはてし所は平かて燈籠あまたたてり、石の段をのぼれば飯綱不動れ本堂より、まうて、美妙ぬし寺僧に守札をこはれたり、其本堂のかたはらよ、唐銅にてつくりし五重の塔繪馬堂などあり、又のぼれば堂あり、いと大きある鏡をすゑたり、こはさいつ比開帳の有し名残あり、こゝより奥の院にゆく坂道一丁あまり登れば、遠方の山のは風に晴ていと涼し、こゝのけしき殊によければ、しばし木陰にいこふ、小さき祠二つあり、下ある一つよ、大天狗小天狗といふ額あり、杉の木の下よあれば、かゝる人世よは多かりといとをかし、下りゆく坂路に脊を上にしてふためく虫あり、大川ぬしとりみて、こはあかね蜩なりといふがふと心ぶとまりて、

梢高く木々になけるもある物を、
　あかね蜩こそかひなかりけれ。

あけを　こう　せミも　とらるれ
あうさらむ　とりも　得　逐はず。
あかね　せみ　いゝに　思へる

かくてもとの道とかの十一丁目まて、下りてまづ蛇の瀧をみんと、左れ方の九折を下る、道は山の片そばよまひてつけたるあて、屏風をたてしたるやうにさかしまに、小石さへありていとゆゝミにくし、かたへをみれば深き谷あり、おそろしさいはん方あし一二丁下るに道の二方にわかれし所あり、かへさのまるべにとかたへの木よ紙をゆひつけて栞とす、すべて左右に樹生茂りていと物すごきに、鶯の聲きこえて、こゝよもわすれ艸おひたり、

忘れ草花咲匂ふ山あれば、
　夏をもしらで鶯やあく、

あく口すさふ物から道のはせいと苦しきに、十七八の若人三人、木の杖をつき高足駄にて、大きある聲に何か語らひつゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

行過ぬるとて、我足の弱きが我ながらあさましくて、かの清少のおもとの稲荷詣のくだりに『いさゝか苦しげなく、おくれてくとみえたるものどもの、たゞゆきにさきたちて詣づるいとうらやまし、たゞなる所にても目もとまるまじき事の、かれが身に只今ならばやとおぼえしか』とあるにいとよう似たりと美妙ぬしに語る、少しゆくに、木の間より瀧川みえて丸木橋あり、こゝのさま書にてよくみるけしきなれば、我らが畫中の人よと笑ひつゝ下る、下りはつれば瀧あり、

石間より落る瀧の音さら〳〵に、
　夏をおぼえぬところなりけり、
谷間よりおちかゝる瀧の白糸も、
　むすばでみるも夏なかりけり、

人々結びみるにいとつめたし、さのみ高からねどけしきいとよければ、美妙ぬし大川ぬし共に繪と物せらる、われもえかゝねばいとくちをし、さばしゐて立かへるに、下りし時だに苦しかりしを、まして登る道思ひやるべし、帽子の下より汗のおつるに、

夏の日の光にわたる我なれや、
　頭と汗のちるぞわびしき、

昨年の夏物しつる日光の霧ふりの瀧にて下りし道も同じやうなれど、こゝも道の程遠ければ今一きはくるし、からうじてのぼりをへぬ、

苦しやと坂打越えてやすらへば、
　吹風涼し杉の下かげ、

しばしいこひて、こたびも右の坂路を下る、こゝもけはしけれど蛇の瀧のやうにもあらず、少しゆくに平なる所あり、もみの木陰いとすゞしければ、涼しの岡とやいはましなどいひ〳〵十丁あまり下る、に道二方にわかれたり、右に二丁あまりゆけばなやしき家あり、其前過たりすればやがて琵琶の瀧あり、蛇の瀧より幅廣く木の間より水おちたり、

四の緒の名におふ瀧ときてみれば、
　うべこそおとのさやけかりけれ、

つゝしみてまうす賤女も草深き片田舎に生れたれば今三五の年を讀めどつゞれとまとふ針のなやしげなると馬草かる術のみ學の道に疎ければ人と物云こんも耻しく只管打なげきのみ侍んべりしせめて和文れ一くだりも綴り得たらんにはと思へどもさせる師とてもなく涙にのみこち侍り先つ頃都なる人のもとより月毎にいらつめといふ物の本を送り來されたれば今は師とし友として頼み侍るに少し物心つきにけりこも皆盛代に難有き貴社の賜物なんなる左のいせ歌郎のまで歌と御思召して餘白ありたらん折いらつめの片隅に掲げ玉へてんや亦彼の本をけがす事もあらんには没書そることいと願しけれあなかして

聞水鷄　　太田みつ子

小夜ふかき叩く水鷄に夢覺めてつれ〳〵わぶるねやのあの哉

仝

まこの宿の門田ゝ水鷄小夜更けてまで打たるれた淋しかりけり

仝

ひるぶゝも聞せぬやとのまばの戸を夜深ゝくひな音づれて鳬

月前水鷄　　仝

爽やかなる月ゝくひなに門たゝき友かとぞおもふ苫荒の庵

幼時の寫眞(韻文)　　弄月子

世よしならもる愛情を　集めて湛らす笑顔こそ
神のたまひしまゝなると　なふ我なからいつの間ゝ。

評　修辭と兎ゝ角、感慨と深く現れました。

花かとまがふ唇ハ　まだ苦しみを味はゝず。
塵をこわたる眼にハ　うき世のちりもいまだ見ず。

片手にもてる犬張子、　母の乳房のはなうまた
○○○○○○○
悲てふものを知らねども　末と片手ゝ全世界。

肉もたかなる双の頬、　よるとしなみの跡ふかく、
今とあがるゝ涙がは、　くめども盡きじまごの思ひ、

なちき無き世のならひとて　あべての人と老ぬるに、
あとか汝のみ只ひとり　世ゝあなして聞く不死の人。

吾こゝろ(韻文)　　同　上

君を思へばうたゝねゝ　たどる夢路もつもふかく、
かはくひまなきまこの袖の　よしや涙にくちぬとも
色そかはらぬ常磐木の　まつ外と無き。

空鳴きわたる雁がねに　結びしもめの覺め來れバ
かたむき初えぬ夜半の月、　まばし雲にあかくろひそ。
千里ゝおはすかの君に　うつして見せむ吾こゝろ。

誹諧論のぎた〳〵

凡そいはもる韻文の範圍に屬せるもれと悉く音律の支配を受け、同時に樂調の下に立つべきもので苟しくも、此規則ゝ外れ、音律によらず縱横無盡、又樂調に從はず不羈獨立でなるのは韻文の眼目で有りません。是はまれ〳〵ゲ固く信ぜる說、かの誹諧發句のやうな、同じく韻文の一部分と名唱ゝ物に於ても同じ理と宛てられます。ことに怪しむべきは森三溪子の瀛車百詠から俄に波が起ッて前後守舊派の誹諧者流が各々筆鋒を研きそまし、まくし掛つて森氏を攻擊し出しました。元より誹諧と幽音なものです。また皮肉なものです。また風流なもれで同時にまた敏捷な物です。只之を以て誹諧又と發句再興の基礎根據と定めるとは扨も意氣込のまりにハ辨護の手弱い事、つまりと韻文に屬そる物れ一大性質にくらい話しです。つゝいて森氏の誹諧論と見て吾々と歸そる慶賀成を表します。森氏！今暫らく熱心に陣を御布きなさい。吾々も其內時を待ッて思ふ處を陳べましやう。

戸隠山紀行（二）

美妙齋主人

右の鳥居ハ一の鳥居とて長野からの登路ハこゝに限ることで、それから力餅を賣つて居た處ハ大久保といふ村いとざや山と言ふ處で追分路にあり、其處に石が建つて居て「右、中社」左、寶光社」と彫つてありました。中社と言ふのハ中院で奥の院へ行くものゝ經る處。寶光社ハ一つ山に別に設けた一宇の社でこゝからも中院へ行けますが、始めて登山するものハまづ中院へ行くのが順路です。はじめ携へた繪圖によれバ此追分から右の道を取つて程なく熊の塔といふ由緒の有るらしい物が有つた趣き。しかし殘念な事、見損ひました。　右に富士見山といふのを眺めて登る山路、さあ聞いた通り弱り果てました。何しろ途ハ柔かい赤土、それで果もない大のぼり、　自然と足に力が入る、　それ丈けに一足下せバぐつと潜りました。　曾て碓氷峠を越した時、其道のわるさ馬さへ脛を沒する勢にハ駭いたものゝ、此處ハ上信の境で通行も有る處ゆゑと諦めましたが、佛境の戸がくしが斯うあらうとは思ひも付かぬ話し。　草鞋がけなら辷らずにハ濟まぬ、下駄がけなら脱がずにハ終らず、私も二三度下駄を吸ひ取られました。　たゞ掛聲ばかり。其くせ、我慢で成るたけよさゝうな道を撰ぶだけ些しも捗らず。儲けものだか、損耗だか泥染めの足袋が出來ました。　やがて引き續く山里、いづれも舊の許多の神官の住ひで、今ハ何れも登山の人のための旅宿、見たのハ其くらゐ、下を向いて足をとられぬ用心するばかり。　中社まで行き着いた時ハ重荷を下したやうな氣がしました。

中社と言ふは思つたよりハ大きな規模、而も登山の人が虛弱でゝもあれバ其上奥社まで猶遙か有る事とて多く此中社限りにして歸る、其爲の拜殿ゆゑ其立派なのハ山中第一です。社ハ白木づくりの宏壯な殿堂、他國にも中々珍らしい普請、別に案内者も持たずに見たのみか、而も寺と違つて其處、只に塗抹彫刻の飾りが無いために深く目に留まる物も無く此處宏壯と感じたのみでしたが、獨り二間四方余ばかりの一枚板の天井に描いてあつた墨繪の龍、筆者ハ誰か、兎に角非凡な出來、只夫が目について後で歸京して圖らず思ひ出したのハ即ち是が曉齋翁の筆であつたので、曾て香亭氏の雅談で讀み、また同氏からも其由緒を直接に聞いた事も有つた、それをさつばり忘れ果てゝゐました。　早く氣がついたらと後で悔るといふぬかりの至り。

中社から直ぐ左にあたつて社務所が有つて、社司久山義男氏の住ひでした。　柴田氏ハ久山氏と懇意な中、柴田氏の案内によつて先此社務所に着き、泥足の事とて裏へまはり、其處の下男と顔見合ハせて柴田氏が愛嬌のある久し振りの挨拶、洗足の水に足を濟めて上れバ俄かに出るくたびれ。廣間二つばかりを過ぎて見晴らしのいゝ一間に案内されました。時計を見れバ正に十二時。　食膳を蕎麥と共に言ひ附けると、引き違へて出した菓子ハ例の越後へ行けバ必ある翁飴でした。

休息して煙草一服、袴を脱ぎ捨てゝ今までの道の事を話しながらつら〳〵家の建築を見れバ何さま昔しのばれるやうな。一間の木目立つた椽側がはるかに走つて、小壁の高さは四尺ばかり。摺金の六角形腑附の釘かくしも處々取れてハ居たものゝ、こゝに衣冠で坐をひろく讃しても失策は無さうな体、見るからが古代に生れた心持が爲ました。　戸隱山と言へバ歷史に緣の深い山、神代記のそも〳〵始め、天照皇大神が素盞命の暴を憤つてこもられた岩窟ハ即ちこの戸隱山で、今でもそれゆゑ手力雄命を祀つてあるとの口傳もあり、維茂が此山に分け登つて鬼女を退治した紅葉狩の故事もあり、今でも山中に紅葉狩といふ處があります、また近くハ武田信玄が河中島の戰爭とゝで埒の明かぬため早く勝たせてと此山に祈つた事もあり、または佐久間象山翁が軍旗と兵書とを携へて此山に籠つた事もあるなど、それやこれやを思ひ出せバ日本建國の昔しからの二千年間を一時に短め合せて其處に生れ出た心持ち。　ことにハ身の前後左右、すべて古風な物で無いものハない――己が姿をさへ顧みなければ全で明治以前の世の中でした。

吾々の部屋ハ奥書院で、其前にハ庭が廣く造つてありました。　左りに當つて峙つ山、其切岸からしたゝる瀧の點滴が常に雨の音をなして、雨をうれへる吾々の耳を幾度か欺きました。　瀧の下流から右へ折れて出來た池水ハ泥にごりで魚も見えず、流れを受ける事とて絶えず水面ハ動搖して雲紋を絞りました。　水々として居るのは岸の草木ばかり、名の知れぬ草に名の知れぬ木、山蕨、木賊、さま〴〵な苔などが愛らしく雜生して、ことに驚いたは菖蒲の莖ハ有つても蕾がやうやく催ほしたと云ふ位な体であつた事です。　七月の中旬に菖蒲が咲かぬとは。

彼是する內持ち運ぶ杯盤、向つて著を取れバ空腹の中々うまい料理、魚ハ燒くにも煑るにも岩魚ばかり、其他ハ玉子ばかり。しかし岩魚の煑びたしから鹽燒、また茶碗蒸しに至るまで中々深山で得られる物とハ思はれぬ計り。特にハ戸隱固有といふ地瘤とか言ふ菌の一種、それが他國で迚も得られぬ物でした。　地瘤とハ形ち土筆の大きなやう、蛇の脊に似た

斑がなつて其色ハ薄鼠、口へ入れゝバぬらついて一寸言へバ蓴菜のやう、しかし美味でした。是ハ地から取つて數時間立つと腐敗して虫もあるとか、其ために戸隠より外へ持出す事も出來ず、長野にも亦無い程です。

地瘤の名ハ猶人が知りませんが、蕎麥に至つてハ信濃の人で戸隠の名を知らぬ者ハ無いくらゐ。東京で更科が其名所と聞いて、さて其の土地へ行つて見れバ更科などさしたる方でハ無いとの事でした。蕎麥ハ縦六寸横四寸ばかりの楕圓形の竹笊に揃へてならべてありました、決して東京などのやうに蒸れさせてハ濫らず、奇麗にそろへて。山家の蕎麥にハ他でも間々この類が有ります。

元よりいづれも笊蕎麥で、種物ハ無く、下地汁の蕎麥に比して劣等なれど殆んど玉に瑕の心持ち。藥味ハ葱に山葵に乾海苔の揉んだの、是等でした。福武氏ハ常からの蕎麥黨、柴田氏もゆづらぬ相手。やゝ冷淡なのが私でした。やがてぞろ／＼ざら／＼。餘所目からは蕎麥の食べ方が一番をかしいもの――鼻息ハあらくなる、目ハすぼッて、そして山葵の涙で一杯になる。一杯二杯と片付けて相手の兩雄も頻りにひしめいで居ました。しかし何れも言葉ほどにハ行かず、強ひる、斷はるでしばらくハ揖擇、やがて食事も果てゝそれから一先休息とて給仕の女が蒲團小夜着など持來らしたのを幸ひ、しばらく横になりました。

二時半といふ頃起きて顔を洗ひ、いさゝか養つた勇氣を力にいよ／＼それから奥の院まで參らうと決しました。社司の久山義男氏ハ旅行中で不在、細君が見えたを幸ひ其趣きを話せバ眉をひそめて今日の道ハ御わるうムいましやうとの言葉、しかし思ひ立つた矢竹心ハ中々之でしづまらず、笑ッて決心の趣を答へるとそんならと言ッて子息に案内させてくれました。またもとのとほりの打扮。裏山を傳はッて山路に就けバ何さまこたへたと言はうの、何と言はうか、其路のわるさ、惡地ほるさ、道といふよりハ泥でした。それもいゝが山路ハ常とてすさまじい虻の攻擊、すこしでも油斷すれバ震へるばかりに嚙まれて、跡にハ殘る疼痛と痒み、ぬかッて扇も團扇も忘れて詮無く、辛くもはんけちを振るばかり。襟をはらへバ足につく、足を逐へバ顔に來る、折角少しいゝ道を見付けても繰り人形の眞似するやうに手足ふれバよろめいて深みへ飛び込むやら、まだ／＼雨ハ無いのがせめても、是で雨に降られたらそれこそ大變。降らなくても虻の用心に安心してハ四方と見られず。ある程厄介な山とつく／＼思ひ知りました。

山ハます／＼登る斗り。いよ／＼深く行けバ行くほど

何處が奥だかわからぬ程、道ハ左右に林と松ばかりで何のながめも無く、やがて次第に行くに從ッて山氣が凛然と肌にしみて來ました。蓊鬱と茂ッてほのぐらくなッされハまた樅と松との森で、中を通して一條の道が有るばかり、森の奥にハ雜草や灌木が叢生して人跡はすこしも止めず、處々足を奪ふやうに狂ひ立ッて飛び流れる溪流の清さ。道の向ふに當ッて見える一構への門、近よッて見れバ荒れさびた隨神門で、見るから胸にとほる石の榜示杭に「下馬」とばかりに唯一句。將軍の肖像ハ雨露と時代に剝落してゐましたが其の剝落が却つて物凄くなりました。空氣ハ最早ひやついて來て、汗ハ出ても氷のやう。それに深山ほとんど晦冥、口に言へぬ一種の臭ひがして、おほれその梢ゑの上に大魔王でもゐるかの心持。少し咳でもすれバ木靈の誤らず答へる、いよ／＼凄味ハ加はッて、正にあり／＼神靈に撲たれるかの迷ひも出るばかりでした。

戸隠ハ海面から五千尺の山。既に此下馬から絶頂までハ遠くも無い事とて肌にハ異常な冷氣を覺えて來ました。道の困難に津々と湧く汗、それも出るや否や冷汗と變ッて、身の内が熱して外が冷え、言ふに言はれぬ心持。のみか山は天狗が棲むとの俗評、いハゆる天狗風が怒號して林立した梢を揉み立てる、樅などの枝葉ハ脆くも吹き折られて鳥の樣に飛ぶ勢ひ、その凄じさ。草も次第に乏しくなり、艶款冬、獨活など嚴寒と物ともせぬのが多く生じて、やがて奥院に近づくに從ひ數十段出來てゐる石段の上に我物顔に生じてゐるのハ樣々な苔でした。たゞ木ばかりハ密封して絶頂を示さず、わづかに灑れる處から仰ぎ眺むれバ大盤石の屛風と建てたむかり。石段の盡きた處が即ち奥院でした。社殿物凄く寂莫として飾ッてある一面の鏡の薄曇りしてゐるのが何やら靈氣を帶びたやう、魔風が時を嫌さず吹き掛けてゐる注連繩の定まる折も無いくらゐ。之に並んで左なる社ハ九頭龍神社と呼ぶ建物、九頭の蛇を祀ッたものとか、蛇ハ今でも生きてゐて日々供御する趣きで、見れバ社殿ハ岩窟にさしかけて出來、其前に九枚の土器が有り、蛇が通ふといふ廻廊が些しバかり出來てゐました。素より人を禁じて窟にハ近づかせず、人も此方から眺めるのみですが、窟ハ高さ三尺余、隱々と薄暗く爲ッてなりました。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY